

入選

テーマ：誰かのために、わたしができること
「いじめを経験して」

香川県立三本松高等学校2年 北村大空

「僕は自殺しようとしたことがあります」。

周囲がどよめく。僕はこの日を境に人生が変わった。

僕がいじめを受け始めたのは小学校低学年の頃だ。太っていて運動が得意でない僕は、いじめの格好的だったのだろう。叩かれたり、教科書に落書きをされたりするのは当たり前、ひどいときにはお金を取られることもあった。

それでも僕はいつも強がっていた。誰にも自分の弱い部分を見せたくなかった。だからいじめを受けていることは、家族や学校の先生にも言わなかった。いや、言えなかった。

相談すれば気持ちは楽になるかもしれない。でも、家族に言えば悲しむだろうし、先生に言えば友達が自分の元から離れていきそうで怖かった。だからいじめられてもいつも我慢していた。

そんな中、自殺をしようと考えたのは小学五年のある日だった。この日もいじめられて家に帰ると、家族は仕事で誰もいなかった。ふと台所を見ると包丁が目に入った。いじめられている光景が鮮明に頭に浮かんだ。目の前にある包丁。

「これで死ねば楽になれる」。

ふと考えてしまった。実際に包丁を手を取ってみる。どこを刺そうか迷った。心臓なら確実に死ぬ。でも痛そう。家族が悲しむ。とても長い時間迷った気がする。結局『死』の恐怖には勝てず、死ねなかった。それから何回死のうと思ったことだろう。数えきれないくらいだ。でもそのたびに死ねなかった。

もちろん死のうとしてしていることなど誰にも言えなかった。毎日が孤独な戦いだった。

そんな孤独な戦いをしているうちに中学生になった。そして、中学

一年の時に集団宿泊学習があった。その最後の夜、キャンドルサービ
スで自分の悩みを打ち明ける時間があった。同じ学年の百二十人ぐら
いの前で打ち明けるというものだ。

この時、ここで自殺をしようとしていることを言えばどうなるのだ
ろうと思った。

気付いた時にはみんなの前で話していた。心の中ではこれからいじ
めがひどくなれば死ねばいいと思っていた。

キャンドルサービスが終わった後、一人の先生が近づいてきて、

「言いくいことをよく言った」
と言ってくれた。

この日以来いじめがきつぱり無くなったわけではない。たまにいじ
められることもあったが、死のうとしていたことをみんなが知ってい
るのでそれほどひどくはなく、また、僕をかばってくれる人も出てきた。
あの日から自分の性格が少し明るくなった気がした。

僕がこの体験を通して気付いたことは、いじめられているときに誰
かに話を聞いてもらいたかったということだ。でも自分からは言い出
せないで、話を聞かずともそばに誰かがそっといってくればだいぶ
心が楽になっただろう。

よくテレビで相談すれば気持ちは楽になるとか、自殺は生きたくて
も生きられない人への侮辱だとか言うが、本当にいじめを受けたり、
自殺をしようとしたりする人はそんなことでつでもいいと感じるのだ。
でもそんなときに何も話さず、そっそばに人がいてくれるだけで、
安心できて、いじめの苦から救われたり、自殺を思いとまったりで
きるものだ。

僕の経験を生かして誰かのためにできること、それは悲しんでいる
人のそばに寄り添ってあげることだ。最初は嫌かられるかもしれない
が、次第に心を開いてくれるだろう。これを読んでいる人も実践して
ください。僕のような苦しみをする人を救うために。